



一覧表

気象庁気象研究所研究官公募	447
教官公募：北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地球物理学教室	448
教官公募：東京大学大学院理学系研究科・理学部地球惑星物理学専攻	449
CEReS 国際シンポジウム開催のお知らせ「アジアの水文環境に関する国際シンポジウム」	450
教官公募：東京工業大学理学部地球惑星科学科	451

編集後記：ここ数年、気象学会の大会では発表件数が300件を超えることが多くなっています。今年の春季大会では発表件数が初めて350件を超えました。20年前は165件だったのですから、倍以上の増加です。おかげで会場は混むし、講演企画委員会はプログラムの編成に悩むのですが、研究が活発になったこと自体は歓迎すべきでしょう。

でも、そのわりには論文数は増えていません。去年1年間に「気象集誌」に載った論文は53件（他に要報と質疑が14件）で、20年前の2～3割増にとどまっています。「天気」の場合は、去年の論文数は21件で、ひと頃よりも減っています。研究時報や欧文彙報のような気象庁の論文誌もページ数が減っています。

こうした背景には、投稿先の多様化があるかも知れません。最近は学会の数が増えたり、外国の雑誌に投稿する人も多くなっているからです。しかし、優れた研究成果が論文にならずに埋もれてしまうことも少なくないようです。

数年前から、大会の第2種講演については論文・報文としての投稿が義務づけられました（今年の春季大会は、新方式試行のため例外）。この規定が守られているかどうかを講演企画委員会が調べたことがありますが、結果は惨憺たるものでした。今のところペナルティはありませんが、規定をちゃんと守っている人には申し訳ない気持ちです。

論文が増えにくい反面、技術報告とかテクニカルノートなどと呼ばれる報告物は非常に増えました。その中には、「天気」の論文として十分に通用しそうな内容のものも珍しくありません。でも、これらは内部資料の性格が強く、配布先が限られます。その上、査読を経ていないものが多いため論文よりも評価が低くなります。論文になればもっと多くの人に成果をアピールできるのに、もったいないことです。

皆さんの引き出しに、せっかくの研究成果が眠っていませんか？ 心当たりのある方は、ぜひ「天気」に投稿して下さい。
(藤部文昭)